

## シュメール語史料にみえる abzu

辻田明子

## はじめに

本稿では、古代メソポタミアのエンキ神<sup>1)</sup>研究の一端として、abzu について議論する<sup>2)</sup>。エンキ神は、古代メソポタミアの宗教を考えるうえで重要な神である。彼は多くの文学テキストに登場し、創造者、運命の決定者、賢者として、話の展開上重要な役割をはたす。彼はまた、魔術や呪文に精通し、人間生活を支える豊穡や工芸のほか、古代メソポタミアに固有の概念である「メ」(me)<sup>3)</sup>を司る。このようなエンキ神は abzu を住処とし、lugal-abzu (abzu の主) の称号をもつ。エンキ神の abzu との関係は、彼のもっとも古い属性の1つであり、エンキ神研究に abzu の考察は欠かせない。

abzu は普通 ZU.AB と表記される。シュメール語ではこれを abzu、アッカド語では *apsû*<sup>4)</sup>

- 
- 1) エンキ神の名はシュメール語で「大地の王」を意味する。一般に、エンキ神の同一神としてエア神が挙げられる。エア神の名をシュメール語で解釈できないこと、エア神の名が、シャマシュ神、シン神、イシュタル神と並び、アッカド語の個人名にもっとも頻繁に用いられることから、エア神はセム系の神であると考えられている [Roberts 1972: 57]。本稿では詳しく議論しないが、エンキ神とエア神の同一視は、前3千年紀最末期以降に進行すると筆者は考えている。
  - 2) 本稿では、前3千年紀半ばから前2千年紀半ばまでの史料を扱う。シュメール語は、前2000年頃には口語として使用されなくなっていたが、文語としてはその後も使用され続けた。とくに、シュメール語の文学テキストの大部分は、古バビロニア期に書き残された。前3千年紀半ばから前2千年紀半ばまでの南部メソポタミアの歴史は、初期王朝Ⅲ期（前2600年頃から前2350年頃）、アッカド期（前2350年頃から前2100年頃）、ウル第三王朝期（前2100年頃から前2000年頃）、古バビロニア期（前2000年頃から前1600年頃）に大きく分けられる。初期王朝Ⅲ期はさらに、初期王朝Ⅲa期（前2600年頃から前2500年頃）、初期王朝Ⅲb期（前2500年頃から前2350年頃）に細分される。また、ウル第三王朝の崩壊からバビロンによるメソポタミア統一にかけての時代を、とくにインシラルサ期（前2000年頃から前1750年頃）という。
  - 3) 「メ」(me) はおそらく、シュメール語の動詞「ある・存在する (me)」に由来する。「メ」(me) は、神の力、神の決定、規範、おきてなどと訳されてきたが、いまだ妥当な訳は定着していない。「メ」(me) と訳し残されることも多い。例えば、Inana and Enki には、王権、正義、技術や音楽など、多岐にわたる事柄が「メ」(me) として挙げられている [Leick 1991: 117]。
  - 4) 本稿ではアッカド語を斜体で示す。また、テキストの引用では、[ ] は粘土板の欠損のため、復元されたものであること、「 」は粘土板の文字の一部が欠損していることを示す。シュメール語の文学テキストは、とくに示さない限り、オクスフォード大学の ETCSL: The Electronic Corpus of Sumerian Literature. (<http://etcsl.orinst.ox.ac.uk>) から引用した。

と読む。一般に、*Enūma eliš*などのアッカド語の文学テキストをもとに、*abzu (apsū)* は天と地の下方にある地下の大洋であると説明される。また、*abzu (apsū)* はエンキ神の住処であるため、エンキ神殿も意味する。さらに、行政経済文書から、*abzu (apsū)* を神殿内の壺や水盤であると解釈する説もある。従来は、文学テキストにみえる *abzu (apsū)* をエンキ神殿、もしくは地下の大洋と解釈し、行政経済文書にみえる *abzu (apsū)* をエンキ神殿、もしくは神殿内の壺や水盤と解釈するのが一般的であった。

*abzu (apsū)* は確かに水と深くかかわるが、その属性の解明は可能だろうか。第一に *abzu (apsū)* の語源の問題がある。アッカド語の *apsū* は、シュメール語からの借用語であると考えられている。しかし、シュメール語でもアッカド語でも、*abzu (apsū)* の説得力ある語源解釈はできない。そのため *abzu (apsū)* は、第三の言語から借用された可能性もある。すなわち、語源から *abzu (apsū)* の本来の姿をたどることは難しい。

第二に、史料の問題がある。*abzu (apsū)* にかんする史料は多いが、*abzu (apsū)* の本質の具体的な手がかりとなる史料はほとんどない。また、ウル第三王朝期以前の史料の多くが行政経済文書である一方で、古バビロニア期以降の史料の多くは文学テキストである。そのため、*abzu (apsū)* の意味の変遷を追うことも難しい。

従来の解釈では、実際は同じ意味ではないにもかかわらず、シュメール語の *abzu* とアッカド語の *apsū* の相違はほとんど議論されてこなかった。また、より古い前2千年紀半ば以前の史料にみえる *abzu (apsū)* と前2千年紀半ば以降に作成されたアッカド語の史料にみえる *apsū* が同じように解釈されてきた。さらに、*abzu (apsū)* とはまず地下の大洋であり、エンキ神殿や神殿内の壺や水盤としての *abzu (apsū)* はこれに現実の形を与えたものであると考えられる傾向があった。

しかしながら、とくにシュメール語の文学テキストにみえる *abzu* は、地下の大洋とは異なる解釈も可能である。そのため、より古い時代の *abzu (apsū)* の姿は、従来の解釈とは違う可能性がある。そうであれば、行政経済文書にみえる *abzu* を神殿内の壺や水盤とし、文学テキストにみえる *abzu* を地下の大洋とする区別も再検討の必要があるだろう。

これらの問題をふまえて筆者は、より古い史料にみえるシュメール語の *abzu* にとくに注目し、その姿を明らかにすることで、*abzu (apsū)* の属性の解明を一步進めることができるのではないかと考えた。本稿では第I章で、エンキ神とのかかわりという視点から、シュメール語の文学テキストにみえる *abzu* を分析する。第II章では、前3千年紀後半の史料を扱い、この時期のシュメール語の *abzu* について考察する。

## I

## (1)

シュメール語の文学テキストの多くは、古バビロニア期にセム人の手で書き残された。そのため、シュメール語の文学テキストにみえる abzu は、アッカド語の *apsû* の影響を受けている可能性がある。本稿では *apsû* に深入りしないが、2言語併記の語彙リストで、シュメール語の abzu とアッカド語の *apsû* が同じ意味ではないことを以下に示しておく。アッカド語の *apsû* は、シュメール語の abzu より意味にひろがりがある。

**Kilmer 1963 : 421 - 446**

[シュメール語]	[アッカド語]
〔e <sub>2</sub> -engur〕-ra	<i>ap-su-u</i>
〔an-X(X)〕-ra	<i>ap-su-u</i>
du <sub>6</sub> -ku <sub>3</sub>	<i>ap-su-u</i>
lal <sub>3</sub> -gar	<i>ap-su-u</i>
Z[U.A]B	<i>ap-su-u</i>

**MSL 13 : 37**

[シュメール語]	[アッカド語]
engur	<i>a-ap-su-um</i>
abzu	<i>a-ap-su-um</i>

カッシート期（前1500年頃から前1150年頃）に遡る前者は、時代はやや下るものの、*apsû* の意味のひろがりがありやすいため、挙げた<sup>5)</sup>。後者は、古バビロニア期に遡るもので、アッカド語の *apsû* がシュメール語の engur を含んでいる。古バビロニア期に遡る語彙リストには、engur と abzu が<sup>6)</sup>、a-ab-ba（海）、sug（沼沢地、葦原）、ambar（沼沢地、葦原）、umah（沼沢地、ラグーン）、engur、abzu、a-mah（洪水）、a-e<sub>3</sub>-a（砕け波、放水口）、kab<sub>2</sub>-ku<sub>5</sub>（樋）、i-zi（波）、a-gi<sub>6</sub>（洪水、波）、kur-ku（洪水、波）の順に、水にかかわるシュメール語の語彙としてあらわれるものもある [MSL 13: 28-39]。シュメール語の文学テキストによると、魚がいるために<sup>6)</sup>、engur は「水の深み」と訳される。abzu

5) e<sub>2</sub>-engur-ra（水の深みの家）はナンシュ神殿の名称だが、文学テキストではエンキ神殿を意味する場合もある。du<sub>6</sub>-ku<sub>3</sub> は東方 [Horowitz 1998: 315-316]、もしくは神殿内の建造物や盛り土などの聖所を指す [Green 1975: 209]。lal<sub>3</sub>-gar は、エンキ神（エア神）の住処の意味がある。lal<sub>3</sub>-gar は地下水の層と説明されるが [Green 1975: 160]、実際には水のひろがりとしての lal<sub>3</sub>-gar を示す例はない [Horowitz 1998: 313-314]。

6) **Iddin-Dagan A : 98 - 99**

98) ku<sub>6</sub> engur-ra-ke<sub>4</sub> mušen an-na-[ke<sub>4</sub>] 99) nin-gu<sub>10</sub> ki-nu<sub>2</sub>-bi-še<sub>3</sub> giri<sub>3</sub> [mu-ni]-ib-ul<sub>4</sub>-e

には、魚のほかに鳥や亀、さらにはヤギやライオンも生息していた可能性があり、engur にくらべて生き物が多様である<sup>7)</sup>。しかし、シュメール語の文学テキストに、abzu と engur の違いは明確には示されない。abzu と engur はエンキ神の住処、もしくはその支配領域としての属性を共有する<sup>8)</sup>。したがって、書き手であるセム人が、abzu を engur と同じ水のひろがりとして認識していた可能性はある。

従来、abzu を地下の大洋であると考えて、以下のようなシュメール語の文学テキストの記述は、神殿や都市の礎が abzu に達するほど深いありさまを示すと解釈されてきた。

**The Keš temple hymn : 36<sup>9)</sup>**

36) te-me-bi abzu-a sig<sub>9</sub>-ga

その基礎を abzu に置く (神殿)。

後の、前1千年紀の古代メソポタミア人は、実際にそのように認識し、地中深くの abzu に達するほどの礎を据えたことを誇る [Green 1975: 167; Horowitz 1998: 309]。シュメール語の文学テキストを残した古バビロニア期のセム人も、同様に理解していたかもしれない。以下の訳はその可能性を示すものである。

**Ur-Namma C : 3**

3) iri bad<sub>3</sub> gal ki gar-ra-zu abzu-ta mu<sub>2</sub>-a

都市 (ウル) よ、あなたが設置した大きな? 城壁は abzu から育ち、

**The temple hymns : 135**

135) iri abzu-ta še-gin<sub>7</sub> sur-ra

都市 (クアラ) よ、abzu で、穀物のように押し割って (sur) でき?

↙ 水の深みの魚、天の鳥は、私の女主人 (イナンナ神) のために? 彼らが眠る地へと急ぐ。  
engur の魚については、The debate between Bird and Fish: 117; Enlil A: 118; Šulgi R: 62; The cursing of Agade OB version: 77; Ninurta's exploits: 93; The death of Gilgamesh: Seg. G 13; Inana C: 65 も参照のこと。

7) 亀については Ninurta and the turtle: Seg. B 36-37, 鳥については Inana and Šu-kale-tuda: 88; PSD 1992: 195 を参照のこと。ただし、ライオンについての表現は、比喩ともとれる [The song of the hoe: 43; The return of Ninurta to Nibru: 70-71]。ヤギについては、エンキ神の舟の名が tarah-abzu (abzu の野生ヤギ) である。

8) **Enki and Ninmah : 13-14**

13) <sup>d</sup>en-ki-ke<sub>4</sub> engur buru<sub>3</sub> a sur-ra ki digir na-me šag<sub>4</sub>-bi u<sub>6</sub> nu-um-me 14) ki-nu<sub>2</sub>-ni i<sub>3</sub>-nu<sub>2</sub> u<sub>3</sub> ku nu-um-zi-zi

エンキ神は水の深み、水がしたたる割れ目、どの神もそのなかを知らない地、彼の寝所で眠っていた。眠りから彼は起きなかった。

ここでは、engur はエンキ神の住処である。

9) このほかの例については、Dunham 1986 を参照のこと。本来 temen (基礎) は土地測量のために杭と縄で区切った範囲の内部、もしくは杭そのものを示したが、古バビロニア期には神殿などの礎も意味した可能性がある [Dunham 1986: 38]。Green は temen (基礎) の本来の意味を考慮して、abzu の広さが示されている可能性も指摘する [Green 1975: 167, 219-221]。

**The cursing of Agade OB version : 74 – 75**

74) <sup>gis</sup> dimgul kug im-du<sub>3</sub>-du<sub>3</sub>-a-bi 75) <sup>d</sup>en-ki-ke<sub>4</sub> abzu-a mi-ni-in-bu

(アガデに) 立っていた聖なる柱をエンキ神が abzu から引き抜いた。

しかし以下に示すように、シュメール語の文学テキストを注意深くみると、abzu について別の解釈も可能である。

**Gudea, cylinders A & B : 584 – 587**

584) e<sub>2</sub> hur-sag-gin<sub>7</sub> im-mu<sub>2</sub>-mu<sub>2</sub>-ne 585) DUGUD-gin<sub>7</sub> an-šag<sub>4</sub>-ge im-mi-ni-ib<sub>2</sub>-dirig-dirig-ne 586) gud-gin<sub>7</sub> si im-mi-ib<sub>2</sub>-il<sub>2</sub>-il<sub>2</sub>-ne 587) giš-gana<sub>2</sub> abzu-gin<sub>7</sub> kur-kur-ra sag ba-ni-ib<sub>2</sub>-il<sub>2</sub>-ne

彼らは（ニンギルス神の）神殿を山のように大きくした。彼らは（神殿を）厚い雲？のように天のなかに漂わせた。彼らは（神殿を）牛が角を高く突き出しているかのように（つくった）。彼らは（神殿を）abzu のカバノキ？（giš-gana<sub>2</sub>）が諸国で頭をもたげているかのように（高くした）。

**Gudea, cylinders A & B : 692 – 693**

692) kur šar<sub>2</sub>-da meš<sub>3</sub> kug abzu-a 693) gurun<sub>7</sub> il<sub>2</sub>-la-am<sub>3</sub>

あらゆる国で abzu の聖なるエノキ？（meš）が果物を実らせているようだ。

神殿の高さと大きさを称える前者によると、abzu には木が生えている。エニンヌ（ニンギルス神殿）の内部を称賛する後者によると、abzu では木に果物が実っている。また、以下に示すように、abzu になぞらえられたエキシュヌガル（ナンナ神殿）では、森の香りがする。

**Rīm-Sîn F : 2 – 5**

2) abzu eš<sub>3</sub> kug mah e<sub>2</sub>-kiš-nu-gal<sub>2</sub>-la-ke<sub>4</sub> …中略… 5) ir dug<sub>3</sub>-ga tir šim <sup>gis</sup>erin-na ha-šu-ur<sub>2</sub>-ra-kam

abzu, 清らかで偉大な聖域, エキシュヌガルは, …中略: エキシュヌガルの描写が続く…良き香り, スギ？（erin）やリンゴの木？（ha-šu-ur<sub>2</sub>-ra）の香る森（のようである）。

さらに、abzu の高さ、もしくは多彩さを引いて、神殿の壮麗さをうたうこともある。

**The Keš temple hymn : 14 – 17**

14) e<sub>2</sub> keš<sub>3</sub><sup>ki</sup> muš<sub>3</sub> kalam-ma gud huš aratta 15) hur-sag-da mu<sub>2</sub>-a an-da gu<sub>2</sub> la<sub>2</sub>-a 16) e<sub>2</sub>-kur-da mu<sub>2</sub>-a kur-ra sag il<sub>2</sub>-bi 17) abzu-gin<sub>7</sub> {ri-a} {gun<sub>3</sub>-a} hur-sag-gin<sub>7</sub> sig<sub>7</sub>-sig<sub>7</sub>-ga

ケシュの家, 国土の領域?, アラッタの怒れる牛。山と共に成長し, 天と抱きあう（ケシュの家）。エクル（エンリル神殿）と共に成長し, 山で頭をもたげる（ケシュの家）。abzu のように {はるか遠く} {色とりどりであり}, 山のように青々としている（ケシュの家）。

これらの比喩表現は、シュメール語の abzu が、人間の直接感知できない地下の大洋というよりは、視覚、嗅覚、触覚といった、人間の五官でじかに感じとれる、身近な場所と

あることを示している。abzu は人々にとって、神殿の称賛の引きあいにはだすほど、美しい場所であった。また、以下のように、神殿そのものを abzu になぞらえて称賛する場合もある。

**Enlil A : 75 - 77**

75) abzu kug-ga gal-bi tum<sub>2</sub>-ma-zu 76) kur sig itima kug ki ni<sub>2</sub> te-en-te-en-zu 77) e<sub>2</sub>-kur e<sub>2</sub> za-gin<sub>3</sub> ki-tuš mah ni<sub>2</sub> gur<sub>3</sub>-ru-zu

聖なる abzu よ。あなた（エンリル神）は大いに相応しい。低い山（冥界？）。聖なる寝所。あなたが元気を回復させる場所。エクル（エンリル神殿）よ。輝く家よ。あなたが怖れを満たす偉大な座所。

この例では、エクル（エンリル神殿）を、以下の3例では、エキシュヌガル（ナンナ神殿）を abzu とみなしている。

**Rīm-Sîn F : 18, 26**

18) da ambar abzu-a e<sub>2</sub>-kiš-nu-gal<sub>2</sub>-la-kam

エキシュヌガルの abzu の？沼沢地の側、

26) šag<sub>4</sub> ambar abzu e<sub>2</sub>-[kiš]-[nu-gal<sub>2</sub>-la-ke<sub>4</sub>]

沼沢地のなかは？エキシュヌガルの abzu,

**Nanna E : 56 - 57**

56) eš<sub>3</sub> abzu barag mah urim<sub>2</sub><sup>ki</sup>-ma nam dug<sub>3</sub> gal tar-re 57) [e<sub>2</sub>-kiš]-nu-gal<sub>2</sub> ki-tuš kug dug<sub>3</sub>-ga-am<sub>3</sub> <sup>d</sup>nin-gal nin-mah-bi

abzu の聖域。ウルの偉大な玉座。大きく、かつ良い運命が定まっている。エキシュヌガルよ。聖なる座所は良い。ニンガル神（ナンナ神の配偶神）はその偉大な女主人である。

**Šulgi O : 9 - 12**

9) e<sub>2</sub>-kiš-nu-gal<sub>2</sub>-la tur<sub>3</sub> <sup>d</sup>suen-na 10) ab<sub>2</sub> zid <sup>su<sup>d</sup></sup>ninda<sub>2</sub> amar kug-ge a-ne di i<sub>3</sub> dug<sub>3</sub>-ga ki-us<sub>2</sub>-sa 11) abzu ki-tuš kug šul <sup>d</sup>suen-na 12) <sup>giš</sup>ešgiri<sub>2</sub> mah an-na sag il<sub>2</sub>-la u<sub>6</sub> di ki us<sub>2</sub>-sa

エキシュヌガル、スエン神（ナンナ神の異名）の家畜小屋よ、豊かな乳の牝牛、種牛、聖なる子牛が飛び跳ねて、よきバターはうず高い。abzu、若きスエン神の聖なる座所よ、偉大なる牧杖は天へとかがげられ、感嘆が地に満ちる。

したがって、初めに挙げた、abzu の上に建立された神殿や都市の描写も、神殿や都市の礎が abzu に達するほど深いありさまを示すと解釈されてきたが、神殿や都市が abzu のように美しく、神聖な場所に建立されたと解釈することも可能であろう。エンキ神以外の神々の神殿と abzu が同一視されているため、筆者はまた、エンキ神の座所という条件がなくとも、シュメール語の文学テキストにみえる abzu は、神聖な場所であったと考える。

さて、シュメール語の abzu を、人間の生活空間の近くに存在する、美しく神聖な場所と

する解釈は、abzu を地下の大洋としてとらえる従来の解釈とは異なる。しかし筆者のこの解釈は、abzu の水とのかかわりを否定するものではない。以下で、水にかかわるエンキ神の属性を検討し、その根拠を示す。

シュメール語の abzu が、地下の大洋という、水のひろがりとしてとらえられてきたために、その主たるエンキ神は、古代メソポタミアの水神であるとされる。実際に、シュメール語の文学テキストにみえるエンキ神は、水にかかわり、おもに水流を司る<sup>10)</sup>。

#### Ur-Namma C : 23

23) <sup>d</sup>[en]-ki-ke<sub>4</sub> mi<sub>2</sub> zid mu-un-dug<sub>4</sub> a-eštub<sup>ku6</sup> <sup>d</sup>ezina<sub>2</sub> še gu-nu sag-e-eš mu-un-rig<sub>7</sub>

エンキ神が私を慈しんだ。増水と豊かな穀物を贈り物とした。

#### The lament for Sumer and Urim : 61

61) <sup>d</sup>en-ki-ke<sub>4</sub> <sup>id2</sup>idigna <sup>id2</sup>buranun-na a im-ma-da-an-keše<sub>2</sub>

エンキ神はティグリス河とユーフラテス河の水を結んでしまった（流れないようにしてしまった）。

#### Ur-Ninurta B : 8

8) <sup>id2</sup>idigna <sup>id2</sup>buranuna ka kug-bi du<sub>8</sub>-u<sub>3</sub> nig<sub>2</sub> giri<sub>17</sub>-zal si-si

(アン神がエンキ神に命じて) ティグリス河とユーフラテス河の聖なる口を開かせる。輝くもので満たす。

#### The debate between Bird and Fish : 6 - 7

6) a [zi]-[šag<sub>3</sub>]-gal<sub>2</sub> numun zid u<sub>3</sub>-tud šu-še<sub>3</sub> im-ma-ab-la<sub>2</sub> 7) <sup>id2</sup>[idigna]  
<sup>id2</sup>buranun-na zag-ga ba-an-la<sub>2</sub> a kur-kur-ra mi-ni-in-tum<sub>3</sub>-uš

(エンキ神は) 生き物が豊穡の種を産む (ための?) 水を手で運んだ。彼はティグリス河とユーフラテス河の側に (それらを) 広げた。(両河は) 水を諸国にもたらした。

ところで、シュメール語の文学テキストでは、水にかかわる神はエンキ神だけではない。例えば、アン神<sup>11)</sup>や、イナンナ神<sup>12)</sup>、イシュクル神<sup>13)</sup>は雨を降らせる神、メスラムタエア神

10) このほか、The lament for Sumer and Urim : 25, 127 - 128 ; Nanna E : 10 - 11 も参照のこと。

11) **Ur-Namma C : 20**

20) an-e ka [kug]-ga-ni mu-un-ba šeg<sub>x</sub> ma-u<sub>3</sub>-tud

アン神が彼の聖なる口を開いた。雨を私 (ウルナンム) のためにもたらした。

12) **Inana D : 63 - 65**

63) <sup>d</sup>inana bar-šeg<sub>3</sub> ud gid<sub>2</sub>-da tag-tag-ge-da-zu-de<sub>3</sub> 64) e<sub>2</sub>-kug-nun-na uru<sub>2</sub>-ze<sub>2</sub>-eb<sup>ki</sup>-ba-za 65) barag nam tar-re-da dur<sub>2</sub>-zu bi<sub>2</sub>-gar

イナンナ神よ、あなたが日がな一日雨? を降らせるとき、あなたのエリドゥの気高くきらめく家で、運命を定める玉座に (あなたは) 腰を下ろす。

13) **The temple hymns : 332**

332) [šibir] kug ubur an-na šeg<sub>x</sub> še gu-nu

(イシュクル神殿は) 聖なる杖であり、天の乳房が降雨と豊穡の穀物 (をもたらす)。

とルガルエラ神<sup>14)</sup>は河の神, エンキムドゥ神<sup>15)</sup>は運河の神, イナンナ神<sup>16)</sup>は水をもたらす神である。

また、アッカド期の円筒印章には、流水に囲まれた部屋にいる神、両肩から水を流す神としてエンキ神があらわれる。前2千年紀前半には、水流と共に描かれた神の図像はイランやシリア出土の円筒印章にもみえ、下位の神々や魔物も水流とともに描写されるようになる [コロソ 1996: 182-185]。図像に選ばれる題材には、時代や地域による流行り廃りがあり、円筒印章にみえるエンキ神もまた、水にかかわる神々のうちの一神なのである。

すなわち、シュメールの神々のなかで、水神としての役割をエンキ神だけに帰することはできない。エンキ神は、水にかかわる神々の一神として、おもに水の流れを司る役割を担っていた。したがって、このようなエンキ神の住処であるシュメール語の *abzu* も、水流のそばに位置する聖所であったのではないかと筆者は考える。

## (2)

シュメール語の文学テキストでは、宇宙は天と地に二分、もしくは天と地と冥界に三分される<sup>17)</sup>。このうち、天と地に二分する世界観は、より古くから史料にみえる。また、天地の下方に存在する地下の大洋としての *abzu* (*apsû*) は、おもにアッカド語の文学テキストに描かれる [Horowitz 1998: 336]。それゆえ、シュメール語の *abzu* が本来、天地と共に宇宙を分かちあっていたのが問題となる。ここでは、王碑文をもとに、都市や国家といった人間世界を治めるための支配権 (以下、王権) の授与にかかわるアン神、エンリル神<sup>18)</sup>、エンキ神を比較し、この問いに1つの答えを提示する。シュメール語の文学テキストで、アン神、エンリル神、エンキ神は宇宙を統治する神である。我々には、王権の授与 (現実世界)

### 14) Ibbi-Suen B: Seg. B 2

2) 2-na-ne-ne lugal id<sub>2</sub>-da-me-eš

彼ら2神 (メスラムタエア神とルガルエラ神) は河の主たちである。

### 15) Ur-Namma A: 25

25) [<sup>d</sup>en-ki-im-du lugal eg<sub>2</sub> pa<sub>5</sub>-ra-ke<sub>4</sub>] [urim<sub>2</sub><sup>ki</sup>]-[ta] [eg<sub>2</sub>] pa<sub>5</sub> ba-da-an-kar

エンキムドゥ神、堤防と運河の主はウルから堤防と運河を持ち去った。

### 16) Inana G: 20

20) a e<sub>3</sub> me-e gen-na a e<sub>3</sub> me-e gen-na

水を放つ者である私 (イナンナ神) は行く。水を放つ者である私は行く。

17) 宇宙を天と地に二分する世界観は The debate between Bird and Fish: 1-2 を、天と地と冥界に三分する世界観は Gilgamesh, Enkidu and the nether world Version A: 11-13; Inana's descent to the nether world: 4 を参照のこと。

18) アン神の名はシュメール語で「天」を意味する。その文字は神を示す限定詞でもある。エンリル神の名には、シュメール語で「風の王」の意味がある。エンリル神はシュメールとアッカドの最高神であり、アン神は神々の父である。例えば、ファラ出土の神名表 (初期王朝Ⅲa期に対応?) は、アン神、エンリル神、イナンナ神、エンキ神の順に書き出される [Krebernik 1986]。



と宇宙の支配（神々の世界）は個別に議論することも当然必要である。しかし、古代メソポタミアの文学テキストの特徴として、現実世界と神々の世界を重ね合わせてとらえる傾向がある。したがって、王権を授与する神の変遷と、地下の大洋としての abzu の属性形成とは関係づけてとらえる視点も必要なのである。

初期王朝Ⅲb 期のラガシュには、支配者が神々に授けられたものを示し、自らの権威を強調する王碑文の形式がある<sup>19)</sup>。そのなかで、ラガシュの主神ニンギルスとエンリル神が支配者に授与するものは交替が可能である<sup>20)</sup>。また、エンリル神による授与は必ず神々の筆頭である。そのため筆者は、この時期のエンリル神は、都市の主神の上位にあって、王権を保証する権威があったと考える。さらに、初期王朝Ⅲb 期のエンリル神は、宇宙の支配者として最高の権威を示す神の称号である lugal an-ki-ka（天地の王）ももつ [RIME 1 : 133]。初期王朝Ⅲb 期のラガシュの王碑文に、アン神による支配者への祝福はない。しかし他都市の王碑文をみるかぎり、この時期のアン神はエンリル神と等位にあるため<sup>21)</sup>、彼も宇宙の最高神であると考えてよいだろう。

その一方で、初期王朝Ⅲb 期のエンキ神は、エンリル神とアン神と同じ称号をもたない。また、ラガシュの支配者へのエンキ神による祝福は、ラガシュの主神のあとである<sup>22)</sup>。したがって、ラガシュでは王碑文に登場するほど重要な神でありながら、エンキ神の権威はエンリル神とアン神に並ぶものではなかった。

19) 以下は、エアンナトゥムの王碑文の1つである。

**RIME 1 : 145 - 149**

e<sub>2</sub>-an-na-tum<sub>2</sub> ensi<sub>2</sub>-lagaš<sup>ki</sup> mu-pad<sub>3</sub>-da-<sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-ke<sub>4</sub> a<sub>2</sub>-sum-ma-<sup>d</sup>nin-gir<sub>2</sub>-su<sub>2</sub>-ka-ke<sub>4</sub> ša<sub>3</sub>-pa<sub>3</sub>-da-<sup>d</sup>nanše-ke<sub>4</sub> ga-zi-gur-a <sup>d</sup>nin-[hur]-[sag]-ka-[ke<sub>4</sub>] mu-[du<sub>10</sub>]-sa<sub>4</sub>-a-<sup>d</sup>inana-ka-ke<sub>4</sub> geštu<sub>2</sub>-sum-ma-<sup>d</sup>en-[ki]-ka-ke<sub>4</sub> ki-ag<sub>2</sub>-<sup>d</sup>dumu-zi-abzu-ka-ke<sub>4</sub> giskim-ti-<sup>d</sup>hendur-sag-ka-ke<sub>4</sub> ku-li-ki-ag<sub>2</sub>-<sup>d</sup>lugal-URU×KAR<sub>2</sub>-ka-ke<sub>4</sub>

エアンナトゥム、ラガシュの支配者、エンリル神が任命した者、ニンギルス神が力を与えた者、ナンシェ神が心で選んだ者、ニンフルサグ神が豊かな乳を与えた者、イナンナ神が良き名前を授けた者、エンキ神が知恵を与えた者、ドゥムジアブズ神が愛する者、ヘンドゥルサグ神が信頼する者、ルガル URU×KAR 神が愛する友人。

20) エアンナトゥムの王碑文では例えば、エンリル神が支配者を任命し、ニンギルス神が支配者に力を授ける場合 [RIME 1 : 145 - 149; 149 - 152] と、エンリル神が支配者に力を授け、ニンギルス神が支配者を任命する場合 [RIME 1 : 156 - 158] がある。

21) 例えば、ウルクのルガルザゲシの王碑文では、アン神がエンリル神と同じ lugal kur-kur-ra（諸国の主）の称号をもち、しかもエンリル神の父神とされる [RIME 1 : 433 - 437]。

このほか、イナンナ神も nin kur-kur-ra（諸国の女主）の称号をもつ [RIME 1 : 176]。イナンナ神は、初期王朝期末期にのみ使用された lugal-kiš<sup>ki</sup>（キシュ市の王）の称号にも関与する [前田 2003 : 23 - 28]。ただし、戦闘の神であったイナンナは、最高神としてではなく、外敵を破る神として王権にかかわった [前田 2003 : 19 - 22]。

22) 例外は、王碑文の形式として、ラガシュの都市神以外の神々がまぎれ言及される場合である [RIME 1 : 126 - 140, 194 - 199]。

シュメールとアッカドの地を統一したアッカド王朝のサルゴンは、王権を授与する神として、初期王朝Ⅲb期のシュメールで最高の権威があったエンリル神を受容する。サルゴンの称号には、guda<sub>2</sub> an-na（アン神のguda祭司）もみえるが[RIME 2:10]、アッカド王朝の王碑文では、王権を授与する神はおもにエンリルである<sup>23)</sup>。

ウル第三王朝期も、主としてエンリル神が王権を授与する。しかし、シュシンは、mu-pa<sub>3</sub>-da an-na（アン神に名を選ばれた者）であり、アン神も王権授与にかかわる[RIME 3/2:302]。さらに、「ウルナム法典」では、アン神とエンリル神が、ウルの主神ナンナにウルの王権を与えている<sup>24)</sup>。アッカド期以前に、神が別の神に王権を授与することはない。したがって筆者はそれを、ウル第三王朝期のアン神とエンリル神の権威が、神々のなかで突出していたためと考える。

一方で、アッカド期からウル第三王朝期にかけても、エンキ神は重要な神ではあった。例えば、アッカド期のナラムシンの王碑文でエンキ神は、イナンナ神、エンリル神、ダガン神、ニンフルサグ神、スエン神、シャマシュ神、ネルガル神と共に、シュメールとアッカドの最も重要な神々の一神として振舞う[RIME 2:113-114]。また、ウル第三王朝期にはウルナム、シュルギ、アマルスエンの3代の王がエンキ神殿を建立している。しかもエリドゥのエンキ神殿は、ウル第三王朝期に大規模に整備された[Safar & Mustafa 1981:46]。しかし王碑文で、エンキ神が王権を授与することはない。

エンキ神の権威に変化がみえるのは、イシンラルサ期以降である。以下にその根拠を3つ示す。メソポタミアの覇権争いのなか、イシンとラルサの支配者は、自らの称号でいくつかの重要な都市の支配を主張する<sup>25)</sup>。イシンの支配者は、ニップル、ウル、エリドゥ、

23) アッカド王朝期の王碑文では、ダガン神、ネルガル神、イシュタル神、エンキ神が王権授与にかかわることがある。ダガン神とネルガル神は西方地域の神として、イシュタル神は戦いの神として西方地域の覇権に関与する。エンリル神に比較すると、彼らが与える王権は局地的である。一方、エンキ神の記述は断片的であり、王権授与にかんするものであると言いきれない。河にかかわるエンキ神の役割と関連する可能性がある[RIME 2:128-129]。

24) RIME 3/2:47

ud an-ne<sub>2</sub> en-lil<sub>2</sub>-le <sup>d</sup>nanna-ar [nam-lugal]-uri<sub>5</sub><sup>ki</sup>-ma [mu-na-sum]-mu-uš-a-ba  
アン神とエンリル神がナンナ神に都市ウルの王権を与えたとき、

25) RIME 4:27

<sup>d</sup>iš-me<sup>d</sup>da-gan u<sub>2</sub>-a-nibru<sup>ki</sup> sag-us<sub>2</sub>-uri<sub>5</sub><sup>ki</sup>-ma u<sub>4</sub>-da gub eridu<sup>ki</sup>-ga en-unu<sup>ki</sup>-ga  
イシュメダガン、ニップルの供給者、ウルに従う者、日毎にエリドゥに行く者、ウルクのen祭司、

RIME 4:284-285

<sup>d</sup>ri-im<sup>d</sup>EN.ZU nita-kala-ga sipa KA-sa<sub>6</sub>-sa<sub>6</sub>-ge-nibru<sup>ki</sup> me giš-hur-eridu<sup>ki</sup>-ga ku<sub>3</sub>-ku<sub>3</sub>-ge u<sub>2</sub>-a-uri<sub>2</sub><sup>ki</sup>-ma sag-en<sub>3</sub>-tar-gir<sub>2</sub>-su<sup>ki</sup> ki-lagaš<sup>ki</sup>-a

リムシン、強き男、ニップルに熱心に祈る？牧人、エリドゥの「メ」(me)と設計図を清める者、ウルの供給者、ラガシュのギルス世話をする者、

前者はイシンのイシュメダガン、後者はラルサのリムシン1世の称号の1例である。

ウルクを、ラルサの支配者は、ニップル、ウル、エリドゥ、ラガシュのギルスを強調する<sup>26)</sup>。第一の根拠とは、イシンとラルサのいずれの王も、エンキ神の守護都市エリドゥにふれていることである。

王碑文では、古バビロニア期にもエンリル神がおもに王権の授与を担う。ただし、この時期にはエンリル神とアン神のほか、エンキ神、ニンマフ神、シャマシュ神（ウトゥ神）も王権を授与する。王権授与にかかわる神が、ウル第三王朝期以前と比べて多様化する。

そのなかで、イシンの王碑文では、ウル第三王朝期のウルナムの例と同様に、アン神とエンリル神がイシンの王権をその主神ニンイシナに授与する [RIME 4 : 87-90]。ところが、ラルサのリムシン1世の王碑文では、アン神とエンリル神と共に、エンキ神がニンエガル神に人々の支配を任せている<sup>27)</sup>。リムシン1世の兄弟であるワラドシンの王碑文でも、アン神とエンリル神と共に、エンキ神がナンナ神にウルの王権を授与した可能性がある<sup>28)</sup>。つまり、第二の根拠とは、アン神とエンリル神と共に他の神々に王権を授与するほどに、古バビロニア期のエンキ神の権威が高かったことである。

第三の根拠は、エンキ神（エア神）の息子とされたマルドゥクを主神に戴く都市バビロンが、最終的にメソポタミアを統一したことである。ウル第三王朝の政治的中心地であったウルの主神ナンナは、amar ban<sub>3</sub>-da-an-na dumu sag<sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>（アン神のじゃれる若牛、エンリル神の長子）[RIME 3/2 : 31-34; 373-374]の称号をもち、最高神であるエンリルとアンとのつながりをとくに強調することで、その威信を示した。同様に、バビロンの政治的な優勢が、その主神や父たるエンキ神の位置づけに影響を与えたことは想像に難くない。

以上の3点を根拠に、古バビロニア期半ばまでに、エンキ神の権威がアン神とエンリル神に並んだと筆者は考える。それにともなって、エンキ神は宇宙の最高神として認められたのであろう。シュメール語の文学テキストには、以下のように、宇宙の下方を統べる神としてのエンキ神がみえる。

26) ニップルの主神はエンリル、ウルの主神はナンナ、ウルクの主神はアンとイナンナ、ラガシュのギルスの主神はニンギルスである。

27) RIME 4 : 295 - 296

<sup>d</sup>nin-e<sub>2</sub>-gal nin-gal kilib<sub>3</sub>-sag-gi<sub>6</sub>-šar<sub>2</sub>-ra-ba an<sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub> <sup>d</sup>en-ki-bi šu-ni-še<sub>3</sub> bi<sub>2</sub>-in-si-eš-a  
ニンエガル神よ、大いなる女主人、あらゆる黒き頭の人々をアン神とエンリル神とエンキ神が彼女の手に乗せた。

28) アン神とエンリル神と nun da-ri<sub>2</sub>（永遠の貴人）がナンナ神にウルの王権と繁栄を約束する [RIME 4 : 241-243]。彼らは、a-a digir-re-e-ne（神々の父たち）と呼ばれている。ここでの nun da-ri<sub>2</sub>（永遠の貴人）が、アン神とエンリル神を示す可能性もあるが、nun（貴人）の称号は主としてナンナ神とエンキ神に用いられる。ここではナンナ神の称号である可能性はないため、この nun da-ri<sub>2</sub>（永遠の貴人）がエンキ神である可能性もあると筆者は考える。

**Inana D : 79 – 80**

79) <sup>d</sup>inana an-da <sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-da di ku<sub>5</sub>-ru-da-zu-de<sub>3</sub> 80) <sup>d</sup>nin-e<sub>2</sub>-gal-la ki-ta <sup>d</sup>en-ki-da nam tar-ra-zu-de<sub>3</sub>

イナンナ神よ、アン神とエンリル神と共にあなたが決定を行うとき、ニンエガル神（イナンナ神の異名）よ、地でエンキ神と共にあなたが運命を定めるとき、

**Gilgameš, Enkidu and the nether world Version A : 11 – 18**

11) ud an-ne<sub>2</sub> an ba-an-de<sub>6</sub>-a-ba 12) <sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-le ki ba-an-de<sub>6</sub>-a-ba 13) <sup>d</sup>ereš-ki-gal-la-ra kur-ra sag rig<sub>7</sub>-bi-še<sub>3</sub> im-ma-ab-rig<sub>7</sub>-a-ba 14) ba-u<sub>5</sub>-a-ba ba-u<sub>5</sub>-a-ba 15) a-a kur-še<sub>3</sub> ba-u<sub>5</sub>-a-ba 16) <sup>d</sup>en-ki kur-še<sub>3</sub> ba-u<sub>5</sub>-a-ba 17) lugal-ra tur-tur ba-an-da-ri 18) <sup>d</sup>en-ki-ra gal-gal ba-an-da-ri

アン神が天を運び、エンリル神が地を運び、エレシュキガル神に冥界が贈り物として贈られたときに、彼が向かったときに、彼が向かったときに、父が冥界へ向かったときに、エンキ神が冥界へ向かったときに、王と共に小さなものたちがついて行った。エンキ神と共に大きなものたちがついて行った。

**The debate between Bird and Fish : 1 – 4**

1) [ud ul re]-「ta」 nam dug<sub>3</sub> tar-ra-a-ba 2) [an <sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>] an ki giš-hur-bi mu-un-gar-re-eš-a-ba 3) […] en geštug<sub>2</sub> dagal-la-ke<sub>4</sub> 4) [<sup>d</sup>en-ki lugal nam]-「tar」-ra 3-kam-ma-bi na-nam

遠い日に、よき運命が定められたときに、アン神とエンリル神が天地の設計図を定めたときに、…知恵広き王は、エンキ神、運命を定める主はその第3番目であった。

**Inana D : 47 – 48**

47) garza-zu me an-na-gin<sub>7</sub> si u<sub>3</sub>-mu-ni-「sa<sub>2</sub>」 48) garza<sub>2</sub>-zu me <sup>d</sup>en-ki-ka<sub>3</sub>-gin<sub>7</sub> giš-hur u<sub>3</sub>-mu-e-ni-hur

あなた（イナンナ神）の儀礼を、アン神（天）の「メ」（me）のように（あなたは）整える。あなたの儀礼を、エンキ神の「メ」（me）のように（あなたは）定める。

ここでは、第一に、エンキ神の治める宇宙の下方が、天（an）に対する地（ki）、あるいは地（ki）の類義語であること、第二に、エンキ神の治める宇宙の下方が、特定の語に定められていないことに注目する。後者については、アン神やエンリル神との対比により、エンキ神の宇宙の下方支配が仄めかされている場合もある。したがって、シュメール語の abzu に本来、地下の大洋としての属性が備わっていたのではなく、古バビロニア期以降にエンキ神が宇宙を統べる神とされたために、そのような属性がシュメール語の abzu に付加されたと筆者は考える。

**(3)**

(1) では、シュメール語の abzu を美しく、神聖な場所と解釈した。シュメール語の

abzu はエンキ神殿として神聖な場所であるばかりではない。シュメール語の文学テキストによると、abzu では「メ」(me) が保管され<sup>29)</sup>、運命が定められる。「メ」(me) や運命は、古代メソポタミア人にとって、この世の原理ともいうべきものであるため [Green 1975:174-177], abzu は「メ」(me) や運命とのかかわりという意味でも神聖な場所である。ここではとくに、神や人間の abzu とのかかわりをもとに、シュメール語の文学テキストにみえる abzu の神聖さについて考察する。

エンキ神は家族や臣下と共に abzu に住んでいた。一方で、エンキ神の家族や臣下ではなくとも abzu にかかわる神々があり、以下のような称号を持つ。

ヌスカ神：šita abzu (abzu のšita 祭司)<sup>30)</sup>

ニンシュブル神：digir gada la<sub>2</sub> abzu (abzu で祭服をまとう神)<sup>31)</sup>

ニヌルタ神：šu-luh kug-ga lugal nam-išib zu barag kug-ge he<sub>2</sub>-du<sub>7</sub> <sup>d</sup>nin-urta abzu eridug<sup>ki</sup>-ga an-da nam tar-ra (聖なる清め式、王、清浄儀礼を知る者、聖なる玉座に相応しい者、ニヌルタ神、エリドゥの abzu でアン神と共に運命を定める者)<sup>32)</sup>

これらの称号はいずれも、祭司のものである。すなわち、エンキ神の家族や臣下でない神々は、祭司として abzu とかかわった。さらに、エンキ神と共に abzu に住む神々も祭司であった。

アサルルヒ神：nam-šita<sub>4</sub> e<sub>2</sub>-abzu zu<sub>2</sub> keše<sub>2</sub>-bi za-e-me-en (abzu の家の祭司たちのまとめ役はあなたである) [Asarluhi A: 36]

ニンギシュジダ神：abzu-a bulug<sub>3</sub>-ga<sub>2</sub> išib mah-am<sub>3</sub> (abzu で成長した者、偉大な清めの司) [Ningišzida A: 6]

ハヤ神：he<sub>2</sub>-du<sub>7</sub> eš<sub>3</sub>-e abzu-a siki bar-ra la<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> en <sup>d</sup>nu-dim<sub>2</sub>-mud-ra (abzu の聖域に相応しい者、王たるヌディムド神【エンキ神の異名】のために髪を解き、垂らす者)

29) 古代メソポタミア人は、神々や神殿には「メ」(me) があると考えた。したがって、「メ」(me) の保持自体は、abzu に特別なことではない。しかし、abzu の「メ」(me) は他の神々や神殿のそれと比べて際立っていた。

**Enlil A: 43**

43) me-bi me abzu lu<sub>2</sub> igi nu-bar-re-de<sub>3</sub>

(エクルの)「メ」(me) は abzu の「メ」(me) であり、人は見ることができない。

**Ur-Ninurta B: 26**

26) <sup>d</sup>en-ki me a-na gal<sub>2</sub>-la mu-u<sub>8</sub>-ur<sub>4</sub>-ur<sub>4</sub> abzu-še<sub>3</sub> mu-u<sub>8</sub>-gar

エンキ神は存在する(すべての)「メ」(me) を集め、abzu に置いた。

前者では、最高神エンリルの神殿の「メ」(me) が、abzu の「メ」(me) に喩えられている。後者を筆者は、abzu の「メ」(me) の完全さを示すものであると読む。

30) Nuska A: 23 を参照のこと。ヌスカ神は、エンリル神の従者 (sukkal) である。

31) Letter from Kug-Nanna to the goddess Ninšubur: Seg. A 5 を参照のこと。ニンシュブル神は、イナンナ神の従者 (sukkal) である。

32) Ninurta B: Seg. C 6-7 を参照のこと。ニヌルタ神はエンリル神の息子である。

[Rim-Sin B: 8]

つまり、シュメール語の abzu は、神々にとっては儀礼を行ううえで重要な場所であった。儀礼の場としての abzu には祭司がおり、そこでは聖なる音楽が奏でられた。

**Enlil A : 58**

58) abzu gudug-bi šu-luh-ha{-zu} tum<sub>2</sub>-ma-me-eš

abzu の gudug 祭司は (あなた【エンリル神殿】の) 清め式に相応しい。

**Enki's journey to Nibru : 125 - 126**

125) e<sub>2</sub> tigi 7-e si sa<sub>2</sub>-e nam-šub šum<sub>2</sub>-ma 126) šir<sub>3</sub> kug teš<sub>2</sub> e<sub>2</sub> ki al-dug<sub>3</sub>-ga

(エンキ神の) 神殿は7つの楽器 (tigi) を準備し、呪文を与える。(その) 聖歌は神殿全体を良くする。

**Enki and the world order : 106**

106) abzu-ga<sub>2</sub> šir<sub>3</sub> kug nam-šub ma-an-la<sub>2</sub>

私 (エンキ神) の abzu では、私のために聖歌と呪文が満ちる。

**Nanše A : 131 - 133**

131) eš-bar kig<sub>2</sub> šir<sub>3</sub> kug KA abzu-ta um-ta-e<sub>3</sub>-a-ra 132) ŠIR<sub>3</sub>.MUŠ<sub>3</sub>-e šir<sub>3</sub> im-ta-zu-zu 133) enkum ninkum šu-luh im-da-pad<sub>3</sub>-de<sub>3</sub>

判決と聖歌が abzu の入り口? から運ばれた後で、歌を暗唱し?, 祭司たち? (enkum ninkum) が清め式を選ぶ。

さらに、エンキ神自身も lugal šu-luh-luh-ha-ke<sub>4</sub> en muš<sub>3</sub> en gal-la <sup>d</sup>en-ki-ke<sub>4</sub> (清め式の主、大いなる en 祭司の領分の王たるエンキ神) と、清浄儀礼を司る者としての称号をもつ [Nisaba A : 39]。エンキ神は実際に、古代メソポタミアの呪文に頻繁に言及され、呪文を司る神でもある。

その一方で、このような abzu の神聖さは、以下に示すように、人間には計り知れないものであった。

**Šulgi G : 44 - 45**

44) urim<sub>5</sub><sup>ki</sup> iri<sup>ki</sup> dug<sub>3</sub> nun-ne<sub>2</sub> ki gar-ra 45) šag<sub>4</sub>-bi dub-šen kug abzu igi nu-bar

ウル、良き都市、貴人が築いた。そのなかは聖なる宝箱であり、abzu であり、見ることはできない。

**Ur-Ninurta D : 6**

6) dim<sub>2</sub>-ma-zu abzu su<sub>3</sub>-ra<sub>2</sub>-am<sub>3</sub> igi bar-re nu-um-zu

あなた (イナンナ神) の心意は abzu のようにはるか遠い。目で見て推し測れない。

このように abzu は、神々が儀礼にかかわる場であるという点で、人間だけではなく、神々にとっても重要であった。また、(1) では abzu を、人間の生活空間の近くに存在すると結論づけたが、同時に abzu は、人間には侵しがたいものであった。

## II

第 I 章では、シュメール語の文学テキストにみえる abzu が、水流近くの、人間に近接する場所であること、神が儀礼にかかわるために神聖視されていたことを示した。前 3 千年紀後半の史料にみえる abzu の姿もほぼこれに重なる。

lugal-abzu (abzu の主) の称号は、ラガシュでは初期王朝 III b 期にはエンキ神に与えられている [RIME 1 : 126-140]。また、エブラ出土のセム語の呪文 (初期王朝 III b 期に対応?) でも、エンキ神がこの称号をもつ [Krebernik 1984 : 170-171]。前 3 千年紀後半に、他の神にこの称号が用いられた例はない。

前 3 千年紀半ば以降、支配者はしばしばエンキ神のための abzu の建立を王碑文で報告する。初期王朝 III b 期、ウル第三王朝期には、ウルの王がエンキ神のためにエリドゥに abzu を建立した [RIME 1 : 405; RIME 3 / 2 : 260-262]。初期王朝 III b 期のラガシュでも、エンキ神のために abzu-pasir が建立された [RIME 1 : 218-219]。

すなわち、前 3 千年紀の半ばには、lugal-abzu はエンキ神の称号と認められ、abzu は彼の守護都市であるエリドゥ以外にも存在した。エンキ神と abzu の崇拜は南メソポタミアを中心に、広汎な範囲に及んでいたのである。以下で、前 3 千年紀後半のシュメール語史料にみえる abzu について検討する。

abzu を含む個人名として早いものでは、ファラ (初期王朝 III a 期に対応?) に me-gal-abzu (abzu の大いなるメ)、me-abzu-ta (メは abzu から)、me-abzu-si (メは abzu を満たす) がある。すなわち、abzu の「メ」(me) とのかかわりは古く、前 3 千年紀半ばには認識されていた。

また、abzu には犠牲や奉納も行われたが、それは abzu の主であるエンキ神のためとは限らなかった。初期王朝 III b 期のラガシュでは、ラガシュの主神ニンギルスとニナの主神ナンシェの祭りの際に、支配者の妻が abzu に犠牲を捧げた<sup>33)</sup>。ウル第三王朝期には、エンリル神、ニンリル神、ナンナ神、イナンナ神が、各々の abzu をおそらくその神殿内に所有し、彼らの abzu にも供物が捧げられた<sup>34)</sup>。そのほか、初期王朝 III b 期にはシャガン神のための

33) ニンギルス神の大麦を食べる祭り (ezen še gu<sub>7</sub>) の際、支配者の妻バラナムタルラが犠牲を捧げた [VS 14 : 119; DP 62]。ニンギルス神の麦芽を食べる祭り (ezen munu<sub>4</sub> gu<sub>7</sub>) の際、支配者の妻ササ [DP 66]、支配者の妻ディムトゥル [TSA 51] が犠牲を捧げた。ナンシェ神の麦芽を食べる祭りの際にも、バラナムタルラが犠牲を捧げた [TSA 1 ; DP 53]。

34) エンリル神とニンリル神の abzu はニップル [TCL 2 : 5501; OIP 115 : 306; MVN 15 : 146]、ナンナ神の abzu はウル [SET : 74]、イナンナ神の abzu はウルク [AnOr 7 : 376] にあった。イナンナ神の abzu はラガシュ [DAS 352] とウンマ [CUSAS 3 : 996] に存在していた可能性もある。壺や水盤としての abzu の解釈は、これらの abzu が彼らの神殿内に設置されていたと考

犠牲が [DP 61], ウル第三王朝期にはメスラムタエア神とラズ神のための供物が [MVN 13: 99] abzu に捧げられている。すなわち, lugal-abzu の称号はエンキ神のものであったが, 一方で abzu は他の神々にとっても重要であった。

このように, 「メ」(me) とのかかわりや, 神々にとって重要であった点で, 前3千年紀後半の史料と, シュメール語の文学テキストにみえる abzu の姿は重なる。

次に, abzu の水とのかかわりを検討する。初期王朝Ⅲb期のラガシュには, 11の abzu が存在する<sup>35)</sup>。そのなかの, abzu-gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka (河岸の abzu) や abzu-e (堤防の abzu) といった abzu の名前は, abzu が河や運河の近くに所在したことを示す。このほかにも, abzu の水流への近さを示す記録はある。

**DP 584** (初期王朝Ⅲb期 / ギルス)

vi 2) GAN<sub>2</sub> abzu-ka 3) ensi<sub>2</sub>-ke<sub>4</sub> 4) en-ig-gal 5) nu-banda<sub>3</sub> 6) mu-na-gid<sub>2</sub>

abzu の(そばの?)畑で, 支配者(エンシ)が?測量を行った。

**VAT 4740** (初期王朝Ⅲb期)

i 1) kab<sub>2</sub>-ku<sub>5</sub> <sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-le-pad<sub>3</sub>-ta 30 1/2 4 gi kin ak-dam 2) 6 gi kin nu-ak  
3) kab<sub>2</sub>-ku<sub>5</sub> abzu zag-bi ii 1) pa<sub>5</sub>-abzu-ta 30 1/2 -eše<sub>2</sub> 4 gi kin-gal-gal 2)  
engar-re<sub>2</sub>-ne 3) e-dab<sub>5</sub>

<sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-le-pad<sub>3</sub>の樋から30ニンダン1/2エシェ4ギの長さ分仕事を行うべきである。6ギの長さは仕事を行われない。abzuの樋がその側にある。abzuの水路から30ニンダン1/2エシェ4ギの長さは大きな仕事である。農夫たちが仕事を引き受けた。

また以下のように, 魚や蛇とのかかわりを介して, abzuの水とのかかわりが強く示唆される。

**Krebernig 1984: 180-183** (初期王朝Ⅲb期に対応? / エブラ)

xv 9) ki muš-gi<sub>6</sub> 10) SU.AB-ša<sub>3</sub> xvi 1) pa?-[sal] 2) KA-pi 3) nu GAR  
e ba

蛇(muš)がかかわる呪文か。

↙ えられることによる。Greenは, 神殿内のabzuを本来, 神殿内の井戸であったのではないかと推測している [Green 1975: 178]。

35) abzu-pasir, abzu-da-nigin, abzu-e, abzu-mah, abzu-NIGIN<sub>2</sub>-tum<sub>3</sub>, abzu-uru-sig-ga, abzu-ban<sub>3</sub>-da, abzu-gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka, abzu-ki-e<sub>2</sub>-ka, abzu-URU×KAR<sub>2</sub><sup>ki</sup>, abzu-KUM.KUである。それぞれ Selz 1995: 122-124; PSD 1992: 192を参照のこと。このうち, 確実にエンキ神殿であるのは abzu-pasir と abzu-da-niginのみである [RIME 1: 218-219; Nik 1: 148]。しかし, lugal-abzu (abzuの主)の称号がエンキ神のものであるため, Selzは残る abzuもエンキ神崇拝にかかわる場所であると推測している [Selz 1995: 121-122]。



**Eannatum 1** (初期王朝Ⅲb期)

xix17) suhur<sup>ku6</sup> abzu-še<sub>3</sub> gub-gub-ba 18) e<sub>2</sub>-an-na-tum<sub>2</sub>-me 19) KA a-ku<sub>5</sub>-de<sub>6</sub>

abzu へ向かう鯉 (suhur)。エアンナトゥムは誓う？。

**ITT 2 1036** (ウル第三王朝期)

14) <sup>d</sup>en-ki abzu-ta e<sub>3</sub>-a-mu-de<sub>3</sub> 15) a-ku<sub>4</sub>-ku<sub>4</sub>-ma

[具体的な内容は不明だが、様々な蛇 (muš) が列挙されている。]

したがって、前3千年紀後半の史料からも、シュメール語の文学テキストの場合と同様に、abzu が水とかかわり、水流近くに位置したと結論づけられる。

このように、前3千年紀後半の史料とシュメール語の文学テキストにみえる abzu は重なり合う。abzu でどのような儀礼が行われたか、また、abzu が水流近くのどのような場所なのかといった、より具体的な情報は得られないが、前3千年紀後半の史料からは、シュメール語の abzu の姿がおぼろげにみえてくる。

まず、ウル第三王朝期の呪文には、以下のようなくだりがある。

**Dijk & Geller 2003 : 57 – 59** (ウル第三王朝期)

6) nun-ne<sub>2</sub> abzu i<sub>3</sub>-dib 7) en-ne<sub>2</sub> eridu<sup>ki</sup>-ta 8) <sup>d</sup>en-ki-ke<sub>4</sub> e<sub>2</sub>-engur-ra-ta  
9) a a-la<sub>2</sub> ku<sub>3</sub>-ga na-ri-ga-ni 10) šu nam-ma-an-ti

貴人は abzu を通った。王はエリドゥから、エンキ神は水の深みの家 (e<sub>2</sub>-engur) から、彼がきよめた聖なる ala 容器の水を手を受け取った。

**Dijk & Geller 2003 : 62 – 64** (ウル第三王朝期)

5) a-abzu 「edin-na」 mi-ni-「ri」

abzu の水を？平原に注いだ。

11) u<sub>8</sub>-gi<sub>6</sub> <sup>d</sup>en-ki-ka 12) abzu na-ri-ga

エンキ神の黒い雌羊は？ abzu で清められた。

これらは、abzu が水を灌えていた可能性を示すが、abzu が水のひろがりそのものである証拠にはならない。前3千年紀後半の史料で、王が abzu の「建立 (du<sub>3</sub>)」を誇ることを考慮すると、abzu とは人為的に造営された施設であると考えられる。したがって、abzu を水のひろがりではなく、その器であると考えるのが自然である。とくに神殿内に設置された abzu については、壺や水盤であるとの解釈もあるが、筆者は神殿内の abzu も含めて、井戸や貯水池の類としてとらえたい。以下が、その根拠である。

地名もしくは聖地が列挙されたリストでは、ギルスのとくに abzu が続く [ATU 3 : 149]。初期王朝Ⅲ期の個人名には、abzu-ki-gal (abzu は大いなる地)、abzu-ki-dug<sub>3</sub> (abzu は良き地)、abzu-kur-gal (abzu は大いなる山) など、abzu が場所であったことを仄めかすものがある。また、初期王朝Ⅲb期ラガシュの都市神に <sup>d</sup>dumu-zi abzu (abzu のあるべき子) という名の神がいる。ラガシュには <sup>d</sup>dumu-zi gu<sub>2</sub>-en-na (堤のあるべき子) という名

の神も存在するため, [dumu-zi+場所]という神名の形があったとも考えられる。したがって, abzu は壺や水盤といった道具類よりも, 井戸や貯水池といった施設である可能性が高い。

しかし, abzu が狭い意味で井戸や貯水池を指すことがあったにせよ, 以下のように, 前3千年紀後半の abzu は, 施設としてより複合的であった。

v P 184 (初期王朝Ⅲb期 / ギルス)

D 1) abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka-ka 2) bara<sub>2</sub> gur<sub>5</sub>-a i<sub>3</sub>-tuš-a

(支配者の妻バラナムタルラが) abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka で, bara<sub>2</sub> gur<sub>5</sub>-a<sup>36)</sup> に滞在するときに,

ii P 214 (初期王朝Ⅲb期 / ギルス)

iv 5) abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka-ka iii 1) bara<sub>2</sub> gur<sub>5</sub>-a i<sub>3</sub>-tuš-a-a 2) da mu-na-ri

(支配者の妻バラナムタルラ) 彼女が abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka で bara<sub>2</sub> gur<sub>5</sub>-a に滞在するときに, 彼女のためにもってきた。

Nik 1 148 (初期王朝Ⅲb期 / ギルス)

iv 4) abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka-ka 5) mu-ti-la-a v 1) giš bi-tag

(支配者の妻バラナムタルラが) abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka に滞在するときに犠牲を捧げた。

初期王朝Ⅲb期ラガシュの abzu gu<sub>2</sub>-i<sub>7</sub>-ka には, 支配者の妻が滞在可能な, 聖所なり, 居室なりが備えられていた。このほか, ウル第三王朝期の abzu への奉納記録は, 王家の直轄地であるプズリシュ・ダガン (ドレヘム) からおもに出土しているため, abzu の管理は支配者に責任があったと筆者は推測する。また, abzu の維持と管理に関係する記録もある。

DP 322 (初期王朝Ⅲb期 / ギルス)

iv 1) ku<sub>6</sub> KA-NA<sub>4</sub> abzu e-ka-kam 2) e<sub>2</sub>-sig<sub>4</sub>-zi-de<sub>3</sub> 3) šu-ku<sub>6</sub>-e 4) mu-de<sub>6</sub>

堤防の abzu (abzu-e) の KA-NA<sub>4</sub> の魚を e<sub>2</sub>-sig<sub>4</sub>-zi-de<sub>3</sub> に漁師が運んだ。

UET 3 1145 (ウル第三王朝期 / ウル)

1) 2 i<sub>3</sub>-giš 2) <sup>giš</sup>ig <sup>giš</sup>šū-kar<sub>2</sub> abzu-ke<sub>4</sub> ba-an-ak

abzu のドアに油を使った / 塗った?

NRVN 1 108 (ウル第三王朝期 / ニップル)

ii 2) šitim abzu-me 3) lu<sub>2</sub>-inim-ma-bi-me

(銀の受け取りにかんして) abzu の大工がその証人である。

CT 10 20 BM 14308 (ウル第三王朝期 / ギルス)

ii 5) 1 gur še zi<sub>3</sub>-da 6) abzu-ta 7) 8 še nin-digir-ra 8) giri<sub>3</sub> <sup>d</sup>ba-ba<sub>6</sub>-da

36) bara<sub>2</sub> gur<sub>5</sub>-a は支配者の子息の私的な聖所, 所有地であるという [Rosengarten 1960: 361-363]。

ra<sub>2</sub>-gaba-ta

nin-digir-ra の母の墓への供物として abzu から穀物を運んだ？文書の内容は不明。

このほか、ウル第三王朝期のウンマでは abzu に大きな衣 (tug<sub>2</sub> mah) が運ばれた [SAT 3 : 1731]。時代は下るが、古バビロニア期のスサ出土の語彙リストにも、abzu にひろげる衣 (tug<sub>2</sub>-nig<sub>2</sub>-bara<sub>3</sub>-SU.AB) が挙がる [MSL 10 : 155]。

このように、前3千年紀後半の史料から、シュメール語の abzu とは本来、水流近くに位置する、神々にとって重要な聖所であったのではないかと筆者は考える。そのような abzu は、支配者に管理責任があった。また、前3千年紀後半の abzu は、神聖さはそのままに、井戸や貯水池を含む、複合的な施設であった。

## おわりに

従来シュメール語の abzu は、アッカド語の *apsû* と同様に、地下の大洋、あるいはエンキ神殿、あるいは神殿内に設けられた壺や水盤であると考えられてきた。abzu とは、まず地下の大洋であり、エンキ神殿や神殿内の壺や水盤としての abzu は、これに形を与えたものとされてきた。本稿では、前3千年紀半ばから前2千年紀半ばまでのシュメール語の史料を分析し、シュメール語の abzu を、水流近くに位置する、神々が儀礼を行うための聖所として、より具体的にとらえられることを示した。

またこれまでは、文学テキストにみえる abzu は地下の大洋、もしくはエンキ神殿とされ、行政経済文書にみえる abzu は神殿内の壺や水盤、もしくはエンキ神殿とされ、その解釈には区別があったが、前3千年紀半ばから前2千年紀半ばまでのシュメール語史料では、文学テキストと行政経済文書にみえる abzu の属性が重なりあっていることも示した。

このような abzu は、エンキ神殿であるほか、ウル第三王朝期には他の神々の聖所として彼らの神殿内に設けられることもあり、南メソポタミアを中心に散在していた。前3千年紀半ばから前2千年紀半ばの史料にみえる abzu はまた、人間に近接していながら、人間には計り知れない神聖さを有する、神々の聖域であった。筆者は、abzu がこのように、古くから人間のあずかり知らぬ聖域であったことが、後に、地下の大洋や始原の神といった、様々な abzu (*apsû*) の姿が生まれる一つの要因となったのではないかと推測している。

また、史料で追えない、前3千年紀半ば以前のより古い時期には、abzu はおそらく、水流近くの聖なる場所に設けられた小さな祠、もしくは神聖視された井戸などの取水設備そのものを意味したことだろう。第II章で示したように、前3千年紀半ば以降の abzu はすでに、それよりも複合的な施設であるようにみえる。ウル第三王朝期には、エリドゥのエンキ神殿である abzu が、大規模に整備拡大される。それによって、エリドゥの abzu が他と比較して際立った存在となり、abzu といえばエリドゥのエンキ神殿を意味するかのような認識が、古代メソポタミア人の間に根付いていったのではないだろうか。そしてこのことと、エンキ

神がアン神やエンリル神と共に宇宙を統治する神となったことが、天地と共に宇宙を分かち abzu の属性の形成へとつながるのではないかと筆者は推測する。今後は、前3千年紀後半から前2千年紀前半の史料にみえるシュメール語の abzu の従来とは異なる解釈をふまえ、abzu の主であるエンキ神の属性の再検討も進めていきたい。

## 参考文献

- Burrows, E. S. L. (1932) Problems of the abzu. *Orientalia Nova Series* 16, 231 – 256.
- Cunningham, G. (1997) *Deliver Me from Evil*. Roma.
- Dijk, J. J. A. van & Geller, M. J. (2003) *Ur III Incantations from the Frau Professor Hilprecht–Collection, Jena*. Wiesbaden.
- Dunham, S. (1986) Sumerian Words for Foundation. *RA* 80, 31 – 64.
- Galter, H. (1981) *Der Gott Ea/Enki in der akkadischen Überlieferung*. Graz.
- Green, M. W. (1975) *Eridu in Sumerian Literature*. Chicago.
- Horowitz, W. (1998) *Mesopotamian Cosmic Geography*. Winona Lake.
- Kilmer, A. D. (1963) The First Tablet of *malku=šarru* together with its Explicit Version. *JAOS* 83, 421 – 446.
- Krebernik, M. (1984) *Die Beschwörungen aus Fara und Ebla*. Hildesheim.
- Krebernik, M. (1986) Die Götterlisten aus Fāra. *ZA* 76/2, 161 – 204.
- Leick, G. (1991) *A Dictionary of Ancient Near Eastern Mythology*. London.
- Roberts, J. J. M. (1972) *The Earliest Semitic Pantheon*. Baltimore.
- Rosengarten, Y. (1960) *Le concept sumérien de consommation dans la vie économique et religieuse*. Paris.
- Safar, F. & M. A. Mustafa, & S. Liyod, (1981) *Eridu*. Baghdad.
- Selz, G. (1995) *Untersuchungen zur Götterwelt des altsumerischen Stadtstaates von Lagaš*. Philadelphia.
- D. コロン (久我行子訳) (1996) 『円筒印章』東京美術.
- 前田徹 (2003) 『メソポタミアの王・神・世界観』山川出版社.

(京都大学大学院文学研究科)